魯迅「孤独者」覚え書

中井政喜

Ⅰ「孤独者」を検討する前に

「孤独者」（一九二五・一〇・一七『彷徨』所収）を検討する前に、先ず二三の事をその前提として確認しておきたい。というのもこの創作小説を執筆する以前の魯迅の思想・生き方を若干にしろ捉えておくことが、「孤独者」の検討を助けると思われるからである。また言うまでもないことながら、「孤独者」を検討することは、一九二五年当時の魯迅の一面を検討することでしかないことをあらかじめ確認しておきたいと思うからである。

さて、一九二五年一〇月「孤独者」執筆以前の、とりわけ「孤独者」の検討に資するうえでの、魯迅の思想・生き方を考えるとき、先ず日本留学時代（一九〇二年―一九〇九年）の初期文学・思想活動の失敗と辛亥革命（一九一一年）の挫折を体験したことを挙げなければならないであろう。ここではこの体験の中で、特に「孤独者」の検討とかかわりを持つ点にのみ触れておくことにしたい。初期文学・思想活動には、

(1)人間の自我と独自性を圧殺し、文化を推進させるすぐれた個性・個人を大衆の力によって埋没させることに反対した個性主義がみられる。それは、政治経済を凌駕して、中国（民族）の

再興にとって根本的な役割を担う、例えば文化を発展させる超越的存在「明哲の士」や、頑冥な世俗と抗する「精神界の戦士」の存在に対する、魯迅の期待に表現された。

(2)民族の独立と圧制からの自由を高く掲げる人道主義的民族観と反奴隷精神（理想としての人間性の主張）等がみられる。

中国改革を求めてのこれらの主張の裏から、その語調から、魯迅自身の力量・能力に対する彼の盲目的過信、よく言えば先覚者としての確信を窺うことができる。つまり魯迅自身が中国における「明哲の士」「精神界の戦士」であると自負していた、と読みとれるのである。(1)

しかし初期文学・思想活動の所産である諸論文や『域外小説集』はまったく反響を呼ぶことなく等閑にふされた。その結果、

(1)魯迅は、自己が改革の指導者・英雄などではないことを思い知らされ、改革の指導者・先覚者としての自己の力量・能力の不十分さに対する彼の失望と幻滅の苦しみは大きかった。

(2)同時に一方、魯迅は先覚者としての自己の思想の正しさに確信を失った訳ではなく、中国改革の先覚者としての彼の思想を受け付けぬ旧社会に対する憎悪は深くなり、世に受け容れられない先覚者持つのに似た孤独感は大きくなった。

帰国後、魯迅は辛亥革命に並々ならぬ姿勢と行動力をもって参加するが、(2)辛亥革命は中国の伝統的価値体系を突き崩しえず、反革命派の権力掌握によって挫折した。この挫折の根本原因を、中国人の伝統的・精神的な悪に魯迅は課し、それを除去し改革する手段を見出しえぬことによって、中国改革に対する、自己に対する、絶望感を一層深めていくことになった。この意味で、魯迅は挫折した改革者であった。つまり彼の場合、中国改革の挫折の原因として、木石のような旧

社会全体に対して攻撃の矛先が向けられた。それと同時に、中国改革の挫折の一環としての自己の挫折の原因のひとつを、改革の指導者としての自己の力量・能力の無さに見、そこにも矛先は自虐的に向けられた。

長い沈黙の期間を経て、魯迅は一九一八年『新青年』四巻五号に「狂人日記」を書いて沈黙を破り、その後一九二六年半ばまで（一九二三年の沈黙に近い程の寡作の期間を挟むが）北京において、小説・評論文・雑感文等を次々と書き継いで行った。一九一八年から一九二三年にかけて書かれた『吶喊』、『熱風』、『墳』に収められた作品群を先ずとり上げて、内容から受ける印象によって分けるとすれば、「明」と「暗」の二つに区別できよう。「明」は、『熱風』、『墳』に収められた雑感文・評論文に代表される初期文学・思想活動の嫡子とも言うべきもので、その主張された思想は、旧社会に対するアンチテーゼ的攻撃を展開しつつ、その初期の思想を一層深化させた内容（例えば深化した人道主義）を持っていた。一方「暗」は、『吶喊』に収められた創作小説である。それらは本来「旧社会の病根を暴露して、それに心を向けるように人々をうながし、方法を講じて治療する希望」（「『自選集』自序」一九三一・一二）或いは意図に基づいて書かれた。しかし改革を受けつけぬ旧社会に対して深く絶望感を抱いていた魯迅にとって、「旧社会の病根を暴露」するとは、彼の絶望の内容そのものを語るという面を持たざるを得ず、結果としてこれら創作小説には魯迅の深い絶望感が漂ったのである。

この区分けの方法は、一九二四年から一九二六年前半にかけての魯迅の作品群に対してもほぼあてはめることが可能だと思われる。(3) この間、『彷徨』、『野草』、『華蓋集』、『華蓋集続編』、『墳』等に収められた作品群の内容は豊かで多彩である。(4)

「ちょうどうぐいすのように、彼（イプセン――引用者注）は自ら歌いたいために、彼は歌うのであって、歌って人々に聞かせ愉快がらせ、ためにならせようとするのではない。」（「娜拉走后怎様」一九二三・一二・二六）

魯迅はこのような近代文学的なイプセンの姿勢を紹介した。封建的な束縛制約の強い旧社会の中で、

「このようにするのは先祖に背く、あのようにしたら又夷狄のようになる」（「看鏡有感」一九二五・二・九）

という守旧派の姿勢を攻撃し、また魯迅は、

「このようなものを作りたい時には、恐らくなおこのようなものを作らなければならないであろう」（「題記」一九二五・一二・三一、『華蓋集』）

と言って、中国改革を求めての雑感文・評論文を書き継いだ。それらは時の封建的束縛・圧力に抗して、彼の内面的要請に基づいて出てきた「明」と言える。

また事実上の一九二三年七月の『新青年』停刊によって、魯迅は一方で旧社会に対する孤立した戦いを強いられ、他方で『新青年』の前駆者の要請という枠付けを離れ、彼の内面的要請・心情により一層忠実に沿う創作小説を書くこととなった。結果としてそれらは、彼の暗い心情をより忠実に写し出した「暗」となり、「孤独者」はまさしくその一つの代表的作品と考える。[5] 只この時期の「明」と「暗」の関係は、一九一八年から一九二〇年にかけてのそれらが互いに排除し合うことなく交互に表出されたとの印象を持つのとは違って、強大な暗さに抗う形としての明るさであり、絶望に徹し切れないが故の希望という内面的葛藤に充ちたものとの印象を受ける。

「私はただ『暗黒と虚無』だけが『実在』だといつも感じているのに、かえってことさらにこれらに対し絶望的な抗戦をしているからです。」（「『両地書』四」一九二五・三・一八）

この時期（一九二四年～一九二六年頃）には魯迅の内面的問題としての「明」と「暗」の相剋を意識せざるをえなかった『新青年』はもはや事実上存在せず、彼は孤立した心情を抱きつつ、自己の突き当った壁として、自らの絶望感ともみあわなければならなかった。

さて、一九二四年以降一九二六年頃まで、魯迅は、

(1)青年文学者の育成を目指し、

(2)現実に根づいた文学・思想活動を通じてより多くの知識人の覚醒を目指して（女師大事件の活動も含めて）、

文字通り自己犠牲的に奮闘している。その結果はより多く「明」の部分として表現されたが、その奮闘ぶりは、全作品量の多さにも窺える。さらに『莽原』の主編発行をはじめとして、魯迅は、青年文学者の原稿を校正し、組版・装幀に気を配り、そのため睡眠時間を減らし、食事を時々忘れ、薬を飲んで体をもちこたえた程、献身的・自己犠牲的に努力した。

「私は以前自身の願望によって、生活の道に一滴一滴と血を垂らして行き、それで他人を養い、だんだんと痩せ弱るのを自覚しながらも、愉快だと考えたのではなかっただろうか。」（「『両地書』九五」一九二六・一二・一四）

このような文字通りの自己犠牲的活動を支えたこの時期の魯迅の思想の一端を捉えておきたい。

「土は天才と比べれば、当然問題とするに足りないものだ。しかしよく苦しみに耐える者でなくては、また土となるのに容易ではないだろう。しかし事は人為のうちにあり、空しく天

賦の才を待つより見込みがある。この一点は土の偉大なところであり、またかえって大きな希望のあるところでもある。」（「未有天才之前」一九二四・一・一七）

すぐれた個性・個人こそが文化・思想を進歩させることができ、中国改革の課題がまさしくそこにあるとすれば、新しいすぐれた個性・個人＝花を育てる土となることを選ぶ、とする魯迅の決意は理解できる。しかし土となるなり方には、実践の問題としてはそれぞれ程度の差というものがあるはずである。魯迅の場合彼をして自虐的にそこに「一滴一滴と血を垂らし」させた思想は一体何であったのだろうか。その一端に触れてみたい。

「しかし私の『彷徨』は多くの時を費すことはまったくなかった。なぜならばその時にはまだニーチェの『ツァラトゥストラ』を読んだ余波がいくらかあって、私のところから文章を絞り出す――絞り出すのに過ぎないのだけれども――ことが出来さえすれば、絞り出しなさい。私のところから爆薬を作ることが出来さえすれば、持って行って作りなさい。そこですぐ決心して、やはり今まで通り投稿するようになった。」（「我和『語絲』的始終」一九二九・一二・二二）

魯迅はこの時期を振り返って上のように述べた。『ツァラトゥストラはかく語った』を読んだ余波が、(6)「私のところから文章を絞り出すことが出来さえすれば、絞り出しなさい」という、言わば超人でない人間にとっては自虐的な所へ落ち込まざるを得ない態度を、導き出していた、と思われる。この態度は、当時のあり方に即して言えば、すぐれた個性・個人を生み出すために文字通りに自己犠牲的に自虐的に土となろうとすることを意味する。それは、すぐれた個性・個人こそが文化・思想の改革者、改革の指導者であるとした個性主義の、いわば裏返しの表現では

なかっただろうか。それというのも、彼自身は挫折の体験を経て、自己がそのような個性・個人ではないことを、自己の非力さを、もとより痛切に知っており、その上でなおかつ、すぐれた個性・個人を育むための、「よく苦しみに耐える者」としての土となろうとしているからである。中国改革に対する願望は、彼自身の主体的生き方にかかわる時、ニーチェの余波が媒介されて、このような形で発現されたと考えられる。以上のことから、次の二点を確認しておきたい。

(1)「孤独者」は、「暗」の部類に区分けされる。

(2)「孤独者」は、挫折を体験した改革者魯迅が、一九二四年以来自己犠牲的に活動をしていた頃の所産の一つである。

Ⅱ『労働者セヴォリョフ』との関係について

「孤独者」について周作人は次のように述べている。

「『孤独者』というこの小説は《彷徨》集の中ではもっとも長いとしなければならない。あわせて五節、魏連殳の後半生の出来事を書いている。この主人公の性格は、多少とも范愛農と似ている。しかしその事態はまったく彼のことではなく、しかも第一節が作者自身の出来事である以外、誰がモデルとなっているのかやはり分らない。この小説は一九二五年に作られており、我々は作者の友人を大体調べてみたが、その中にはこのような人物は捜し出せないようだ。というのも当時の彼の旧友を我々は大てい知ることができるのだから。」（『魯迅小説裏的人物』、周作人、一九五四）

周作人によれば、魏連殳の性格はいくらか范愛農に似たところがあるけれども、彼の事態は范愛農の場合とは違っており、当時の魯迅の交友関係の中にはそれらしい人がいないと言う。魏連殳は魯迅の創造力に負う所の大きい人物ということになる。そこで許欽文の次の言葉を参考にして手がかりを求めて行きたい。

「魯迅先生は、この一篇（『孤独者』を指す――引用者注）を書く四年前に、アルツィバーシェフの《労働者セヴォリョフ》を翻訳している。セヴォリョフは、行きうる道の無い境遇の中で、行きうる一筋の道を捜さないわけにはいかず、トルストイの無抵抗主義に対して反抗を起こさずにはいられなかった。しかも不幸な者達に対しても、幸福な者に対してと同様に宣戦したのである。彼は、行く道のない所まで追いつめられた時、劇場の観客にむかってピストルを乱射し、社会に対しての復讐をなしとげた。彼は力と意志のすべてをもって一生涯戦かった。このような個人を前提としたニーチェ式の強者の行動は、まったく提唱する価値のないものだ。しかし救いようのない社会において不幸な者達のために改革を計ろうと考えた者は、この異常な心理を起こし易い。『孤独者』の中の魏連殳は、多少このような所があるだろう。もちろんそれぞれの状況は異なり、両者の関係は決して深いものではない。」

（『彷徨分析』、許欽文、一九五八）

許欽文は、『労働者セヴォリョフ』を「孤独者」との比較の材料としてとりあげる。セヴォリョフの社会に対する復讐の心理は、多少魏連殳に共通するとしつつも、「もちろんそれぞれの状況は異なり、両者の関係は決して深いものではない」としている。そこで先ず『労働者セヴォリョフ』の荒筋を追いつつ、許欽文の指摘が妥当なものかどうか、を検討してみたい。魯迅の翻訳

した『労働者セヴォリョフ』（アルツィバーシェフ（一八七八―一九二七）・原作）の底本は、第一次大戦戦勝後、上海のドイツ商人のクラブの書籍を接収整理中に見つけ出したもので、彼はこの独訳本を一九二一年重訳し終わり、一九二二年五月に出版した。[7]

『労働者セヴォリョフ』の主人公工業労働者セヴォリョフはもと学生であった。一九〇五年のロシア革命の時期に自己の幸福を顧みず、生命の危険を冒し、改革という共同の事業のために奮闘した。革命勢力の後退に及び、彼は官憲の手から脱走して追われる身となり、或るアパートに身を潜めることとなった。偶然隣室の住人であった作家志望の学生アラジャーエフは、トルストイ的人道主義・無抵抗主義の信奉者であった。この二人の最初に交わす会話は鋭く対照的であり、彼らの思想的対決が物語の一つの主題となる。アラジャーエフは、人間に健全な理性と明晰な判断力がありさえすれば、ひとりの悪人も存在しえない。除去しうる表面的な環境が、人間の善行を妨害している。天性において人間は善人であるから、愛・自己犠牲・同情がこの社会に存在しえ、社会を前進させうるのだ、と話す。これに対しセヴォリョフは、天性において人間は略奪本能に支配されている。愛・自己犠牲・同情は、それを抑制したり、醜態を隠すためのフタに過ぎない。現在の社会の矛盾した悲惨な現状がその証拠であり、故に人間・人類を憎悪する。これは自分の経験から得たことだ、と話す。この導入部分に続いて、一九〇五年後のロシア革命の退潮期の中で、餓死寸前の失業労働者が盗れる姿（第3章）や、成り行き上労働組合運動の指導者の一人となった者が、弾圧追放を受けて乞食となる姿（第4章）が描かれる。アパートの同居人の元教師はロシアの改革のために職を棒に振ってしまい、妻の奔走でやっと手に入れた小役人の地位も、まぬけと言われて辞め、迫りくる飢えと立退きのために一家五人の絶望に陥る状態が描か

れる。アラジャーエフは、もとの同志の依頼によって、やむなく彼らの書類・名簿や爆発物を預ったり、またこの一家のために借金の奔走をした。そして同じアパートに住む耳の遠くて身寄りのない美しい娘オーリャから、小売商人との結婚の話を打ち明けられる。アラジャーエフの感化を受けた耳の不自由なオーリャは、修道院に入る美しい夢を見ながらも、将来の生活のために、今肉欲の塊のような小売商人との結婚を迫られていた。その救いの手をアラジャーエフに求めて、彼女は相談に来たのだったが、アラジャーエフは気が付かなかった。そのことでセヴォリョフは、人道主義者アラジャーエフを詰問する。オーリャの魂に貴いものを注ぎこみ、鋭敏にさせ、そのために今彼女の苦しみを耐え難くさせておきながら、アラジャーエフは救いの手を伸べることができない。これは夢想家・理想主義者の欺瞞ではないのか、夢想家アラジャーエフの大きな罪ではないのか、と。セヴォリョフは、現在のロシアにおいて救われる方法とて無い人々に、高潔な思想や将来の黄金時代の夢想を持たせることは誤りだ。必要なのは、嘗て善であったり、現在善であり、善でありうるものをすべて打ち倒したものに対して、人々の憎悪を呼び起こすことだ、と言うのである。その夜セヴォリョフは夢の中で彼の分身と論争する。分身は言う。犠牲が無ければ物事は為し遂げられない。前進のために一歩一歩と悪を掘り崩し、真理に到達するのだ。我々は土地を肥沃にする肥料となり、この土地から新しい生活の芽を萌え出でさせるのだ、と。セヴォリョフは怒りをもって答える。我々の死骸の上に築かれる偉大な将来に対して、我々の短い犠牲的生涯は余りに惨めだ。我々の血を飲み、我々の苦しみを娯楽とみなし、犠牲となった我々を踏みにじる者に対して、誰が復讐するのか、と。その夢から醒めた未明、官憲の手入れがあり、セヴォリョフは台所の窓から間一髪脱出した。この捜索には本来無関係であったアラジャーエフ

の部屋の戸を、セヴォリョフの隠蔽を疑って官憲が叩いた。アラジャーエフは書類と爆薬を預っていた。アラジャーエフは、かつての同志であった者達の生命の安全のために、銃撃でこれに答えつつ、書類を焼き払った後、官憲に射ち殺された。アラジャーエフは身をもって、愛・自己犠牲・同情の存在を証明した。セヴォリョフは、その日尾行がつき、警察と群衆に追跡され、追いつめられていく。人々の中で誰ひとり彼を匿ったり、追跡者の邪魔をしたり、セヴォリョフのために道をあけてくれる者は無かった。完全な包囲網の中に落ち込んだセヴォリョフは、追いつめられて劇場の二階の桟敷に逃げこんだ。階下は、おもしろそうに舞台に向いている頭と肌ぬぎの肩と美しい装飾に充ちた輝く海であった。セヴォリョフはこの人の海に向けてピストルを無差別に連射する。

「彼は、冷血で残虐な歓喜を抱いて、復讐を行なった。彼自身がいつも遭遇した、損われ、苦悩し、そして破壊されたあの幾多の生活のために。」（『工人綏恵略夫』）

この物語を魯迅がどのように紹介しているかを、「訳了『工人綏恵略夫』之后」（一九二一・四・一五）によって二点見ておきたい。

「人は生物であり、生命がすなわち第一義である。改革者は多数の不幸な者達のために、『一生で最も貴重なものを犠牲にし』、『共同の事業のために死へと赴き』、ひとりセヴォリョフだけを残して去った。しかしセヴォリョフも追及の手の中でいたずらに生きながらえているのにすぎず、包囲しつつ迫りくるものは滅亡であった。この苦しみは、幸福な者によって全く理解されないばかりではなく、いわゆる『不幸な者達』によっても全く理解されなかった。彼らはかえって追及者に加勢して迫害を加え、彼の死を喜び、そして『他の一面でも、

まさしく幸福な者と同じように生活をダメにしていた。』

セヴォリョフは行きうる道の無い境遇で、行きうる道を捜さないわけにはいかなかった。（中略）彼は『経験』に基づき、トルストイの無抵抗主義に対して反抗を起さないわけにはいかなかった。しかも不幸な者達に対しても幸福な者に対してと同様、宣戦しないわけにはいかなかった。

そこで社会に対するセヴォリョフの復讐が成就される。」（「訳了『工人綏恵略夫』之后」一九二一・四・一五）

改革者セヴォリョフは、多数の不幸な者達のために自己の生涯を犠牲にした。それにもかかわらず、社会の誰からも、当の多数の不幸な者達からさえも迫害を受けるのである。そのため彼は全社会に対して復讐する。改革者と多数の不幸な者達との隔絶が、悲劇的に現われる。そこに改革者の大きな苦しみと滅亡があった。

「この本の中の人物を見てみると、偉大なることセヴォリョフやアラジャーエフ――彼は無抵抗主義を堅持できなかったけれども、結局愛のために犠牲となった――のごときは言うまでもない。たとえその他の小人物、それでもって救いうる手段とて無い社会を浮彫にしている小人物であっても、いつも変わることなく人間性を示しており、このありのままの姿は無意識のうちにロシア人民の偉大さをますます示し現わすのである。私達が試みに中国において捜してみるなら、恐らくカーテンの後の年老いた男女と小売商人を除いては、他の人物を見つけることは確かに容易ではないだろう。ロシアには存在した。」（同上）

改革者と、その救済の対象である不幸な者達との悲劇的隔絶が描き出されているにもかかわら

ず、魯迅はこの隔絶を埋めるものをロシア人民の中に見出していた。すなわちアルツィバーシェフによってありのまま描かれたロシア人民の持つ人間性の中に見出していた。しかし魯迅は、その同じものを中国人の中に見出すのは容易でない、奴隷根性に充ちた卑屈な人間（「カーテンの後の年老いた男女」）と、肉欲の塊のような人間（「小売商人」）以外は、と言う。一九二一年当時、魯迅がいかに中国人に対して失望していたか、その深さを物語るであろう。

一九二六年魯迅はこの本を選んで出版した意図を次のように述べ、セヴォリョフに対する共感・同情を隠さなかった。

「民国以前・以後、私達の中にもセヴォリョフと境遇の大変よく似た沢山の改革者がいた。だから他人の杯を借りたのだろうと思う。しかし昨晩少し読んで、たとえばその中の改革者の圧迫されること・代表者として苦しむことは、当時のことばかりであろうか、たとえ現在でも、たとえ将来、たとえ何十年後であっても、境遇の彼と似ている多くの改革者がなお存在するだろう、と私は思った。」（「記談話」一九二六・八・二二）

魯迅はもともとセヴォリョフに対して共感できる素地を多く持っていた。例えば第一章で触れたように、魯迅は中国旧社会から被った先覚者・改革者としての傷に苦しみ、改革を受けつけぬ木石のような旧社会全体を憎悪した。これは、挫折した改革者の味わう苦しみ・憎悪、挫折した改革者の持つ厭世的個人主義と言うことができ、セヴォリョフの心情と共通する。しかし魯迅の挫折の場合、自らには先覚者としての力量・資格が本来無かったのだ、本来自らは改革の指導者たりうる人材ではなかったのだ、という自虐の方向にも彼の矛先は等分に手厳しく向けられた、と思われる。そこで魯迅は心情的にセヴォリョフに十分共感しえた反面、セヴォリョフ的形の復

讐は彼にとって不可能であった。

では魯迅の心情の中にある、この挫折した改革者としての復讐の心情は、どのような形で表出されたのであろうか。その一端は、作品として「孤独者」の魏連殳に典型的に表現されたと思われ、この意味で、セヴォリョフの社会全体に対する復讐の心理が多少魏連殳に共通する、とした許欽文の指摘はほぼ正しい。しかし私は、「多少」どころか、セヴォリョフと魏連殳の関係はこの意味で深いし、そのことから『労働者セヴォリョフ』と「孤独者」の関係をもっと掘り下げてみる必要を感ずる。そこで次章に「孤独者」を検討してみたい。

Ⅲ 「孤独者」の解釈

「孤独者」の解釈をめぐって、中国、日本の各研究者の対立する点に整理を加えて（敬称を略させていただいた）、私なりの「孤独者」の梗概を提出することにしたい。

(A)魏連殳に対する批判と捉える論をめぐって

①李桑牧は、〔8〕語り手「私」は「作者」魯迅であるとし、「私」と魏連殳の生き方を対照的に捉える。「私」魯迅は、希望と戦いを捨てず、倦まず抵抗し反抗し、戦友と新たな道を捜し求める。一方魏連殳は、自己の幸福を求めて旧社会と妥協し堕落した（それが報復の意味とする）個人主義的知識人であり、「私」は彼に批判的でありながら、かつ彼に同情を寄せている、とする。

②津田孝は、〔9〕やはり「私」と魏連殳の生き方を対照的に捉え、魏連殳を改革に背いた堕落者とし、「私」を堕落と滅亡の道から離れえた、魯迅の将来の行く道を示す人物としている。

③許欽文（前掲論文）も、語り手「私」は「作者」魯迅であるとするが、ただこの両者をそれ

ほど対照的には見ず、「作者」魯迅は、旧社会において迫害された気骨を持った知識人の運命に厚い同情を寄せつつも、孤独にたてこもる魏連殳を批判したとする。

④一九七六年版『彷徨』所収の「孤独者」の注釈は、[10]魏連殳の挫折と堕落を描き出すことによって、魯迅は知識人の弱点（精神の空虚さや動揺、脆弱等）を批判している、とする。

上記の李桑牧、津田孝の場合特に、「私」＝魯迅と捉え、「私」と魏連殳を対照的に解釈して、個人主義的知識人批判を導き出している。その結果魏連殳の生き方に対する魯迅の批判、魯迅の戦闘性を浮彫にしている。しかしこの方法については、語り手「私」をそれほど能動的積極的人物と読み込むことが可能であろうか、という疑問を持つ。竹内好は、[11]「在酒楼上」と「孤独者」を論じて、「どちらも無人格的な『私』によって媒介されて」はいるが、主人公の人格は創造されたというのにふさわしい、と言っている。魏連殳の人格と対比して読めば、「私」に対するこの「無人格的」という形容は決して間違っていない、と私は思う。またこの四者が魏連殳に対する魯迅の批判を読みとる場合、魯迅自身の持っていた暗い心情の存在を軽視している傾きがあるのではないか。

「私自身は、私の魂の中に毒気と鬼気がある、といつも感じています。私はそれを強く憎んでおり、取り除きたいと思います、しかし出来ません。私は極力隠していますけれども、それでも他人に伝染させることをいつも心配しております。」（李秉中宛て書簡、一九二四・九・二四）

この「毒気と鬼気」、暗い消極的側面、さらには復讐の心情を、魯迅は「孤独者」において批判的対象として描いたのではない、と私は思う。むしろ彼はこの暗い側面を徹底的に意識化対象

化しようとしたと言う方が正確ではないか。その場合彼は、挫折した改革者の心情によって、魏連殳に共感し、同情し、感情移入をしている、と私はより強く感ずる。ただ対象化であった以上、そこには批判的要素をおのずから含みこんでおり、そのことによって魏連殳に対する批判を読みとることは不可能ではない。特に、一九二八年以降マルクス主義と本格的に接触していった魯迅の思想・生き方を見、また中国の近現代史を顧みて、その上で「孤独者」を考察する場合、上記の事情に引きづられて、魏連殳批判の可能性を拡大して捉える傾向があるのではないだろうか。しかし、一九二五年当時の魯迅の意図・心情としてはどうであったのか。例えば中国民衆に対しての失望感は概して大きかった。民衆との隔絶感を深く、彼はこのことを苦悩し、有効な打開の道を探り出しえなかった。その所を確認すれば、例えば許欽文のように、魏連殳の「大衆とのつながりを持たず、大衆とともに打って一丸となることができなかった」（許欽文前掲論文）点に対して、少くとも魯迅の積極的批判を読みとる場合、無理が生ずる、と私は思うのである。まして一九二五年「孤独者」執筆後しばらく、魯迅がこうした「批判」に基づいて、知識人の「弱点」から脱却する思想的痕跡の存在を、私は見つけ出すことができない。逆に一九二六年七ヴォリョフに対する共感を「記談話」に読むのである。つまり第一章で論じた「孤独者」執筆以前の魯迅の生き方・思想から考えてみると、「個人主義的」知識人魏連殳に対する「厳しい批判」（李桑牧）や、孤独に立てこもる知識人に対する「厳しい批判」（許欽文）を読みとることは困難と思う（勿論許欽文、李桑牧は一方において魏連殳に対する同情の存在を指摘してはいるのだが）。

⑤その点、「『彷徨』について――全体的把握の試み――」（共同研究）が、[12]「『私』と魏連殳もまた、魯迅自身の投影された人物」と考え、魯迅が、魏連殳のような「このような世にい

れられないこともかえりみず、あくまで妥協せず、結果として破滅に至る人間に、ある種の共感にも似たものを抱いていた」とし、「魯迅の筆は一種の批判はあるけれども決して非難の色は帯びていない」とするのは、何故そうなのかの説明が不十分とはいえ、的を射た評価だ、と思う。

⑥さらに竹内好が、[13]「ともかく、魯迅にある沈鬱な思想が、ようやく形をととのえたのがこの作品である」としているのは、具体性に欠ける憾みがあるものの、炯眼と思う。

(B)堕落か復讐かをめぐって

堕落か復讐かという問題は、解釈として対立するものではなく、むしろ重点の置き方の違いと言える。

①李桑牧（前掲論文）は、魏連殳が、世俗の光栄を求めて、旧社会と「無恥な妥協的行為」に走り（これが報復の意味なのである）、節を折った、とする。

②津田孝（前掲論文）も、魏連殳を自己の幸福のために改革の道に背いた裏切者、堕落した人間と捉える。

③一九七六年版の「孤独者」注釈では、魏連殳は「反動勢力の重圧のもとに、孤立反抗するにすぎず、結局絶望のうちに世の中を玩んで不遜な態度、自暴自棄の態度をとり、さらには反動軍閥のふところに投ずるほどに堕落した」とする。

第一の問題点としては、李桑牧、津田孝のように、魏連殳が、世俗の光栄或いは自己の幸福を求めて堕落の道を歩んだ、と解釈するのは妥当であるかどうか、という点である。「私」宛ての手紙で魏連殳は次のように語った。魏連殳は寒さと飢えに迫られながらも、改革の理想を忘れなかった。それは、魏連殳が立派に生きていくことを願う人がいて、それが挫折者魏連殳の心の支

えとなっていたからだった。

「『しかし今は無くなってしまった、この一人すらいなくなってしまった。』」（「孤独者」）

「『同時に、私自身は又、私が生きて行くのを願わなかった人々のためになるように、ことさら生きてやろうと思った。』」（同上）

この記述に依れば、魏連殳が、今まで尊重してきた理想を踏みにじって、旧社会の悪に加担しようとするのは、世俗的光栄や幸福を求めてのことではなく、むしろ「ことさら」かつての自己のあり方を破滅させようとする魏連殳の屈折した心情に依るものと受け取れる。またもしも単に魏連殳が理想を捨て世俗的光栄・幸福を求めようとしただけであるならば、肺を病んでいた彼がその後なぜ死期を早めるような自暴自棄の生活を意識的に送ったのだろうか。

第二の問題点として、魏連殳の「堕落」そのものを考えてみたい。彼の最後の行動を、進歩に資するのか、反動に堕するのか、という明解な尺度をあてて考えるとすれば、堕落したとする上記の三者の評価は正しい、と思う。しかしそれはあくまで結果に対する評価であり、その結果に至る過程そのものを明らかにするものではない。つまりこの場合、魏連殳の堕落の内容をより深く明らかにし、さらにそこから魯迅の思想・心情に迫ることこそ求められることではないか、と私は思うからである。そこで魏連殳の最後の行動を復讐と解する説を紹介したい。

④許欽文（前掲論文）によれば、魏連殳は失職のため困窮し、「そこで杜師長の顧問となった。これは一時の余命を長らえさせるためではなくて、旧社会に対する反抗のためであった。彼は旧社会に対して復讐しようとした。」ではどのような反抗の仕方、復讐の仕方を魏連殳はとったの

だろうか。

⑤茅盾によれば、[14] 魏連殳は、しばらく生き続けて行くことを願ってくれた人を失うことによって、「変わったのであり、彼は自己を破滅させることによって『復讐』したのである。彼は杜師長の顧問となった。彼のこの境遇の突然の変化、性格の突然の変化は、多くの人々の醜い姿を暴き出した。彼は勝利したのだ！しかしまた彼は予定どおりに自己を破滅させた。」魏連殳は、自己を破滅させることによって「復讐」した、と茅盾は指摘する。

以上みてきたことを簡単にまとめると、魏連殳は挫折を体験した改革者であった。しかしなお改革の理想を捨てず、飢えや寒さにも耐えてきた。しかし、失職の困窮の中で、自分を見守ってくれた人を失ったことをきっかけとして、彼は自己を破滅させることによって旧社会に復讐しようとする、ということになる。つまり自虐的な復讐をしたのである。このような理解に基づいて荒筋をみて行きたい。

魏連殳は、小学校一つ無い寒石山から外へ出て留学した人であった。彼は「新党」と呼ばれ、中国の改革を志して、既に挫折による失望感を嘗めた人であった。魯迅が、中国人の伝統的精神的な悪、旧社会の暗黒に絶望し、一九一九年頃暗黒に染まらぬ汚れない幼い世代に中国の将来の希望を託したように、魏連殳は次のように語る。

「『子供はとにもかくにもよいものだ。彼らはまったく天真だ・・・』」

「『大人の悪い性癖は子供達には無いものだ。後天的な悪は、君が平素攻撃する悪のように、あれは環境が悪くさせたのだ。もともとからいえば決して悪くない、天真なんだ・・・。僕は、中国の希望しうるのは、ただこの一点にのみある、と思っている。』」

言うなれば、魏連殳は、人間の天性の善を信ずるというアラジャーエフ的人道主義を語ったのである。しかし子供の純粋さに対する彼の讃美は、したたかの打撃を被った。

「『考えてみると、ちょっと奇妙だと思うよ。僕が君の所へ来る時、大層幼い子供を大通りで見たんだ。蘆の葉っぱを持って僕を指して、殺せ！と言うんだ。その子はまだよく歩けないほどなのに・・・。』」

これが、子供から被った第一の打撃である。魏連殳の所に従兄とその息子がやってきた。彼らは、祖母に仕えた女中に無期限で貸した、彼の唯一の財産である家を相続して、この女中を追い出そうと計っていた。彼はこの父親と父親そっくりなその子供をひどく憎悪して言う、「『二人とも人間でないようだ』」と。魏連殳は、中国の将来の望みをかけた只一つの存在子供に対して、失望を免れなかった。アラジャーエフ的人道主義は、魏連殳の場合、このように破綻している。語り手「私」から見れば、彼は自ら孤独の中に閉じ込もりすぎ、社会を余りにも暗く考えすぎている。しかし魏連殳は、自分の運命が孤独な祖母の運命を受け継ぐのかもしれない、そして彼自身の孤独な運命のために以前泣き納めてあるのだ、と言う。かつて魏連殳は祖母の葬儀に号泣したことがあった。その葬儀の時、儀式は落度なく進行していったが、人々は一滴の涙さえ零さない彼に不満を持ち始めた。

「みんなは不愉快そうに散会しようとするかのようだった。しかし連殳の方はまだ草むしろに坐って物思いに沈んでいた。突然、彼は涙を零し、つづいて声をもらし、すぐにまた長い号泣に変わった。手負いの狼が、深夜に広野ではえ叫ぶように、痛ましさの中に怒りと悲哀をまじえて。」

魏連殳は、窓下に坐っていつもいつも針仕事をし、絶えて笑顔を見せなかった祖母、それでありながら彼の面倒をいつもみてくれた祖母を語った。「自らの手で孤独を作り出し、また口の中に入れて咀嚼している人の一生」を彼はよく理解していた。彼の涙はこの祖母のために流された、そして祖母と同じように孤独を咀嚼して行くだろう自己のためにも流されたのである。魏連殳は後失職して困窮しながらも、「『僕は・・・、僕はまだしばらくは生きて行かなければならない・・・。』」と「私」に言った。旧社会に手痛く失望した孤独な彼には、まだそのために生きて行かなければならないもの、改革の理想・心の支えがあった。そして或る日魏連殳からの手紙が「私」に来た。

「『君は少しく僕の消息を知りたいかもしれない。今すっかり君に話そう、僕は失敗してしまったのだ。以前、僕は失敗者だと自ら思っていた。今、あれは決してそうではなかった、今になってこそ本当の失敗者となってしまったことが分った。以前、僕のしばらく生きていることを願う人がまだいて、僕自身もまだしばらく生きたかった時には、生きていけなかった。今、必要がなくなったとしてよいのだが、しかし生きていこうとする・・・。』

『しかしそれでも生きていくのか?』

『僕のしばらく生きることを願った者は、自身では生きて行けなかった。この人はすでに敵に誘殺されてしまった。誰が殺したのか。誰も知らない。』

『人生の変化は何んと速いことだろうか。この半年来、僕はほとんどこじきになりかけていた。実際、すでにこじきとみなしてもよいくらいだった。しかし僕にはすることがまだあり、僕はこのためにこじきであり、このために凍え飢え、このために寂寞であり、このため

に苦しむのを願った。しかし滅亡は願わないことだった。分るだろう、僕のしばらく生きるのを願ったひとりが存在したこと、その力はこのように大きかったのだ。』」

挫折した改革者魏連殳は、凍え飢え、苦しみに耐えて、なお改革の理想を忘れなかった。それは、魏連殳がこの道を忘れず生きていくことを願った人がいたからで、その人の存在が失敗者・挫折者魏連殳の心の支えとなっていた。

「『しかし今はいなくなってしまった、このひとりすらいなくなってしまった。同時に、僕自身も生きていく資格がないと思った。他人はどうか、やはり資格がない。同時に、又僕自身は、僕の生きて行くのを願わなかった人々のためになるように、ことさら生きてやろうと思った。幸いにも僕の立派に生きて行くことを願った人はすでにいなくなってしまった、もう誰も心を痛めるものはない。このような人を悲しませることは、僕の願わないことだ。しかし今はいなくなってしまった、このひとりすらいなくなってしまった。まったく愉快になった、まったく気持がよくなった。以前憎悪し反対したあらゆることをすでに自ら僕は行ない、以前崇め尊重し、主張したあらゆることを僕は拒絶した。すでに僕は本当に失敗している、――しかし僕は勝利を得た。』」

これ以前、魏連殳は、自らを改革の道に躓いた失敗者だと思っていた。そこで彼は冷やかな人でありながら、彼と同じような失意の人に対しては、親しみをみせた。失職してからの彼は手近な家財を売り尽し、貧窮の底に落ちて、自嘲の影さえあった。例えば、彼が外の子供達の声を聞きつけて、落花生を一つかみ持って出ていくと、「子供達の声はすぐ静かになり、しかもみな逃げていくようだった。彼はなお追いかけて、ちょっと話かけたが、返事は聞こえてこなかった。

彼もすぐ影のように静かに帰ってきて、もとどおり落花生を紙づつみの中に入れた。『僕のものというだけで食べてはいけなくなったんだ。』彼は低い声で嘲るように言った。「孤立した彼は、祖母と同じように、自らを孤独のまゆの中に閉じ込め、その暗い中から社会を眺めた。また自らの手で孤独を作り出し、口の中に入れて咀嚼していた。しかし実は彼の失意・絶望の有様こそが、希望を意味した、というひとつの逆説が存在した。「私」に宛てた手紙に語られたとおり、彼は杜師長の顧問となり、自らを苛め、自らを破滅させようと意志し、これまで宝のように大切にし、理想と崇めたすべてのものを地に叩き付け、踏みにじり、嘲笑した。それは、挫折した改革者の旧社会に対する復讐である。只魏連殳の復讐が、セヴォリョフ的復讐と異なる点は、まさしく自虐的な表われ方をしたことにある。こうして魏連殳は真の失敗者となった。

「私」の再び山陽から S市に戻ってきた日が、偶然にも、久しく肺を患っていた彼の葬式の日であった。聞けば、彼はおとといに死んだという。

「『もしもあなたが一ケ月早くおみえになったら、ここの賑わいを見るのに間に合ったでしょう。三日にあげずの酒宴のあそびや酒令、しゃべるものはしゃべり、笑うものは笑い、歌うものは歌い、詩を作るものは作り、麻雀を打つものは打ち・・・。』

『あの人は前には、子供達が父親を見るよりももっと子供達を恐がり、いつも声を低くして気を静めていました。近頃はまったく変ってしまいました。しゃべることもでき騒ぐこともでき、私どもの大良達もあの人と遊ぶのが大変好きで、ちょっと暇があれば、すぐに皆あの人の部屋に行くんです。あの人の方も色んなやり方でからかって遊ぶんです。あの人に物を買って欲しいと頼むと、あの人はひと声大の鳴き声をまねさせたり、或いは頭をコツンと

地面に打ちつけておじぎをさせるのです。フフ、本当に賑やかに過ごしましたこと。二ケ月前二良が靴を買って欲しいと頼みました所、やっぱり三度コツンと頭を地面に打ちつけたんです。どうして、今でもまだはいていますよ、破れちゃいません。』」

かつて子供の純粋さに敬虔な恐れさえ抱いた彼が、今は逆に子供の美しい所、純粋さを汚し、踏みつけてしまおうとした。しかし彼の自棄の態度、以前軽蔑し憎悪したあらゆるもののためにことさら生きようとする姿、多数の不幸な者達のために改革をめざすという理想を捨てたこの行動が、当の民衆の側からは尊敬すべきこと親しむべきことに見えたというもうひとつの逆説がここにあった。

「『すでに僕は本当に失敗している、――しかし僕は勝利を得た。』」

彼は理想を捨て改革の道に背いたことによって、完全な挫折者・失敗者となったが、民衆を含めての旧社会の俗悪な者達に対しては勝利を得た。その勝利とは、彼にとって、冷笑する他ないような勝利であったろう。死んだ魏連殳は、軍服に正装され、棺に横たえられていた。

「私は永別した連殳を最後にひと目見ようと近づいた。彼は、似つかわしくない衣冠の中に、安らかに横たわり、眼をつむり、口を閉じていた。口のあたりには、氷のような冷やかな微笑をただよわせ、この笑うべき死体を冷笑しているかのようだった。」

こうして彼は、中国改革の夢を描き、理想を追った自己を滅亡させ、滅亡させることによって旧社会を嘲弄し、復讐したのであるが、しかし今また以前軽蔑し憎悪していたものに成り下った彼自身に対しても、魏連殳は冷笑を忘れなかった。こうして一切のものを冷笑し、冷笑する自己をさらに冷笑する魏連殳の屍を「私」は見た。この絶望に包まれた彼の死を哭するにふさわしい

号泣が、あのかつて聞いた、「手負いの狼が、深夜に広野でほえ叫ぶように、痛ましさの中に怒りと悲哀をまじえ」た魏連殳の号泣が、「私」の耳の中からもがき出てきたのである。(15)

最後にこの章での私の言いたかった点を整理しておきたい。第一に、『労働者セヴォリョフ』は「孤独者」に対してどのように位置づけられるべきであろうか、という点である。

①どちらの小説も、挫折した改革者による、旧社会に対する復讐をテーマとしていること。

②魏連殳は、アラジャーエフ的人道主義の破綻を体験し、その後形式こそ違え、セヴォリョフ的復讐の心情に基づいて行動したこと。

③周作人の指摘によって、魏連殳のモデルの実在した可能性は少なく、魏連殳は魯迅の自己分析、特に自己の暗い心情的側面についての分析と対象化と捉えた方がよいと思われ、その場合、魯迅のその暗い心情こそは、セヴォリョフの挫折した改革者としての心情と共感しえたものであったこと。

以上のことから『労働者セヴォリョフ』は、魯迅が、彼の暗い心情・挫折した改革者としての復讐の心情を吐き出すための、最初に遭遇した道しるべの役割を担ったのではないだろうか。道しるべと言うのは、「孤独者」が十分独自なすぐれた創造的作品として結晶していると思われるからで、その点でこの道しるべを発見して共感し、その視点から自己の思想・心情を分析・対象化し始めた魯迅は、(16)一九二五年一〇月中国におけるセヴォリョフの運命を、中国に根付いた形で描き出すことに成功したのである。さらに一歩進めて言えば、その運命は、中国におけるセヴォリョフの魯迅的運命と言えようか。というのは、セヴォリョフの復讐が、不幸な者・幸福な者すべてを含んだ社会全体に対する憎悪に基づいて、無差別の殺人という復讐を実行するものであ

ったのと比較して、魏連殳の復讐の仕方は、自己を破滅させることを通じての旧社会に対する復讐という自虐的形を魯迅がとらせたことから言うのである。

そこで第二に、何故自虐的復讐の形をとらせたのであろうか、という点である。

①初期文学・思想活動の失敗、辛亥革命の挫折を経て、中国改革を目指し行動した魯迅は挫折を体験する。前に触れたとおり、魯迅は改革を受け付けぬ旧社会を憎悪した。その一方彼は自己の挫折の原因のひとつを自己の力量・能力の不足に求め、このことが痛みを伴った厳しく鋭い内省、自虐的内省を彼にもたらせた。

②辛亥革命挫折後、彼は中国改革に対する、また自己に対する絶望に陥り、この絶望の苦しみから逃れるために、精神を麻痺させひそやかなる自己の死滅を願うという、失意の自虐的生活ぶりであった。

③一九一八年以後魯迅は作品を発表するようになりはしたが、一九二五年当時にあっても彼の絶望感、或いは挫折を体験した改革者としての、魯迅固有の（自虐的側面を含んでの）、心情・思想は基本的部所において変っていなかった。

以上のことから、挫折を体験した改革者としての彼の復讐の心情的要求は、セヴォリョフのようにストレートな形で表出されず、屈折した自虐的復讐という形をもって表現されたと思われる。つまりそれは、これまでの魯迅の生き方、経験・思想・心情に即した表現のされ方であった、と思う。

Ⅳ 復讐の心情をめぐって

それでは一九二五年一〇月当時、魯迅が自虐的復讐というつきつめた形で復讐の心情的要求を「孤独者」に写し出さずにはいられなくさせたものは、何であったのだろうか。

(A)女師大事件は、一九二五年表面化して以来八月に至る段階では、必ずしも事がうまく運んでいなかった。一九二五年一月、学生代表が教育部に女師大の実情を訴え、楊蔭榆校長の更迭を要求する。三月、北京に客死した孫文の葬儀に学生の参加することを楊校長は禁止する。学生側は無視して参加。四月、章士釗が教育総長を兼任。五月七日、国恥記念日の講演会を楊校長が企画する。学生側は楊校長の出席を拒否する。五月九日、楊校長は、許広平・劉和珍等六人の学生自治会の代表を退学処分にする。五月二七日、「対于北京女子師範大学風潮宣言」を魯迅等教員七名が出す。この後『現代評論』派との論争が始まる。五月三〇日、五・三〇事件が上海で起こり、北京でもさかんに集会などが開かれる。七月二八日、一旦五月九日に辞職していた章士釗が再び教育総長に就任した。八月一日、楊校長は武装警官の出動を求め、学生に退去を命令する。さらに学生の拒否により、学校を外から封鎖し、電話線を切り、食堂のまかないを停止した。八月六日、章士釗は、女師大を解散し、教育部による接収を行なおうとし、それは閣議によって即日公布された。八月七日、学生側は、同情的教員とともに校務維持会を作り、教育部の措置に対抗した。八月一三日、魯迅は、校務維持会の委員になったという理由で、教育部の僉事の職を罷免される(八月三一日平政院に提訴)。八月一八日、北京大学評議会は、女師大解散の措置に抗議して、教育部との関係を断つことを決定する。一方、胡適・陳源等保守派教授一七名は、早やかに学問の道に向うべきだと評議会に抗議し、評議会決議の再審議を要求する。女師大事件は、「すでに二つの思想的、政治的立場の衝突であった」(『魯迅』、丸山昇、平凡社)、つまり新旧の

闘争の一環となっていたと思われる。八月二二日、教育部専門教育司司長劉百昭がごろつきや女乞食を雇って女師大にのりこみ、学生を殴打して追い出す。九月二一日、追い出された学生は、宗帽胡同に仮校舎を借り、この日開学式を行ない、校務維持会による運営を続けた。[17]

上述のように、とりわけ八月段階において、新旧の闘争の一環であった女師大事件は、新の側に不利な情況に追い込まれつつあった。当事者のひとり許広平の思い出を引用する。

「事実における圧迫（参照『華蓋集』等）、暗黒を代表する章士釗達の反動勢力、正人君子達の卑劣な陥井が、先生を痛憤させ病気にさせてしまった。寝食をとらなかったうえに、長期間酒びたりとなっていた。医者は診察したあとで、処方箋を書くことができず、まず禁煙・禁酒することを彼に求めた。しかし先生を仔細に観察してみると、禁酒はまだ可能としても、禁煙はとてもできることではないようであった。当時彼の家に住みこんでいた或る同郷の人と相談し、一緒に彼に勧めに行った。まる一夜というくり返し説き明す時間を費やして、どうやらやっと考えが変わり、医者の話のとおり、しっかりと病気を治すことを承知した。」（『欣慰的紀念』）

「医者の警告は、絶対タバコをすってはならない、さもなくば薬をのんでもききめはないというものであった。周囲の人々は皆不安になった。ある夏の夜、彼の同郷の人の知らせを得て、すぐ、私達は彼の客間で、婉曲に話した。彼が余りにも自暴自棄になってはならないとお願いし、敵に対処するために、軽々しく自分を病気にさせ、敵を愉快がらせ、自分の仕事を続けられなくさせてはならないとお願いした。私達のことばは何んと粗雑であったことか。しかし真摯な心が、魯迅先生のいくばくかの許容を得させえたのである。後彼自身の認めた

ところによると、〈野草〉の中のあの『臘葉』は、あの摘みとられて〈雁門集〉の中にはさまれたまだら模様のかえでの葉は、すなわち自らをたとえたものであった。」（『関于魯迅的生活』）

これは、女師大事件のさ中で魯迅が疲労と憤りのために自暴自棄になっていたことを物語る。そうした魯迅を許広平が説得した「ある夏の夜」とは、いつのことであろうか。「『野草』英文訳本序」は「臘葉」を次のように解説する。

「『臘葉』は、私を愛する者が私を維持保存しようとしていることから、書いたものである。」（一九三一・一一・五『二心集』）

つまりこの「臘葉」は許広平の説得を契機として作られた、と思われる。[18] 「臘葉」は一九二五年一二月二六日に書かれており、また一九二四年夏には女師大事件はまだ始まっておらず、したがって「ある夏の夜」とは一九二五年の夏の夜を指すことになる。[19]

女師大事件の渦中で魯迅は論敵との筆戦などに疲労を顧みずに新の側に立って尽力した。しかし旧勢力は卑劣な手段をも駆使して、横暴に学生側を推しまくり、一方魯迅の苦労は仲々成果として表われなかった。こうした事態に対して、一九二五年の夏頃、魯迅は疲労と失望と憤りを免がれず、そのため彼の生活・活動ぶりが自暴自棄・自虐的になっていたことが窺われるのである。挫折を体験した改革者魯迅は、あらためて女師大事件で改革の側の不利な形勢の中で崩れかかろうとした、と思われる。そうした彼の心の中で、旧社会・旧勢力に対する復讐の心情的要求が強くなっていた、としても不思議ではない。

(B)第一章で触れたように、魯迅は一九二四年頃以来裏返しの個性主義に基づいて「一滴一滴血

を垂らし」すように中国改革のために奮闘していた。しかし恩恵を被る側で時としてそのような魯迅の自己犠牲の辛苦・労苦にまで親身に思い至ることがなく、結果として彼らがその果実を受け取ることをあたかも当然の権利とみなしている、と魯迅に思わせる場合もあったのではないだろうか。魯迅は、「一滴一滴血を垂らし」すような献身の辛苦をおくびにも出さなかった。[20] まして例えば青年文学者の感謝を多く期待していた訳ではないであろう。また青年文学者の方でも師と仰いだ魯迅に十分に感謝していたのではあろう。しかしそれが気持として行為として魯迅に伝わらなかった場合もあり、作品評価の見解の相違によって彼ら師弟の間に感情のくいちがいを生ずる場合もあったであろう。[21] そうしたことから起こる魯迅の復讐の心情、この場合言うならば、魯迅の献身に便乗して利用することに対する、恩知らずに対する、恩を仇で返す者に対する献身者としての復讐の心情は、例えば「犠牲謨」（一九二五・三『華蓋集』）「頽敗線的顫動」（一九二五・六『野草』）に漏らされている。しかしこの献身者としての復讐の心情は、一九二五年当時必ずしも魯迅の心の中で明確な形をとり支配的な強力な心情となっていた訳ではないと思われる。[22] というのも彼が自己犠牲的活動を自ら意志するという立場にある以上、その矛盾は明らかだからである。ただこうした自己犠牲的活動による疲労や病気と、この活動にもかかわらず、容易に報われないことに対する失望が、一九二五年夏頃の女師大事件での失意に輪をかけ、挫折した改革者としての復讐の心情を一層煽ったとは考えられる。

さて上述のこの二つの事情によって、一九二五年夏頃魯迅は自暴自棄に陥り、挫折した改革者としての旧勢力・旧社会に対する復讐の心情を彼は内にたぎらせていた、と思う。しかし一九二五年夏の許広平等の懇請と説得を契機として、その後彼は立ち直ることができた。[23] またそれに

は、女師大事件における女師大生の不屈の戦いぶりや、その後の政治的状況とからまっての女師大事件の好転（一一月章士釗の辞任、一二月女師大・女子大の相方の存続の決定）に依る所もあるであろう。少くとも「臘葉」を書くことのできた一二月頃には、魯迅は恐らく自己の気持を整理できていた、と考えられる。それでは、一時激した、挫折した改革者としての復讐の心情に囚われ、自暴自棄に陥った危機から、彼が脱却を完了しつつあった、と思われる一九二五年一〇月という時点において、「孤独者」を書いた魯迅の心情・意図はどこにあった、と考えるべきであろうか。この一時激した、挫折した改革者としての復讐の心情を、彼は「孤独者」において対象化し形象化し、作品として吐き出してしまうことによって、カタルシスを遂げようとしたのではないだろうか。いわば自新の道を再び探ろうとしたのではないだろうか。この場合、魯迅の心情・思想を「孤独者」という作品に結晶化させるうえで大きな力があったものに、『吶喊』を書いた頃には希薄であった作家としての自覚・意欲（内面的要請に忠実に基づこうとする意欲も含めて）を魯迅が持つようになっていたことを挙げておきたい。この作家としての意欲と表裏の関係にある『新青年』という枠付けを離れたことも、第一章で触れたように、彼の内面的要請・心情を忠実に表現できる一つの条件であった。

さて最後に、一九二四年から一九二六年頃にかけて魯迅の文学・思想活動のあり方を、深い所で規定した裏返しの個性主義（この場合「ニーチェの『ツァラトゥストラ』を読んだ余波」と表現されたもの）は、いつどのように克服されたのであろうか、という問題に若干触れておきたい。「魯迅とニーチェ」において尾上兼英氏は、狂飆社をたたく決意をした一九二六年一一月を魯迅とニーチェとの訣別の時期としている。[24] 私もこの時期に賛成であり、私の言う裏返しの個性主

義をどのように克服したのか、について自分なりの見解をここに記しておきたい。

この裏返しの個性主義に基づいた、「一滴一滴と血を垂らし」すような彼の行為は、一九二六年一一月『狂飈』に依った高長虹の魯迅攻撃によってもっとも無残に報われた。

「以前私を利用したことのある者は、今私が旗を伏せ鼓をやんで浜辺に行方をくらまし、もう二度と利用する方法がないと見ると、すぐ攻撃を始めた。長虹は『狂飈』第五期で力を尽して攻撃」（「『両地書』七三」一九二六・一一・一五）してきた。

「彼らの当時様々に私を利用したことは、私は分かっていました。しかし生かして血を吸うことができないと見ると、打ち殺して煮て食おうとする。これほど悪辣さを彼が持っているとは、なお思いもかけなかった。」（同上）

「私はこの数年来、他人のために少しく尽力したいといつも思っていました。だから北京にいた時、命を捨てるほどに仕事をし、御飯を食べることを忘れて、睡眠を減らして、薬を飲んでは編集し、校正し、文章を作りました。実を結んだものが、すべて苦い果物だとは誰が思ったであろうか。」（「『両地書』六二」一九二六・一〇・二八）

「この数年のうち、私は青年文学者達に多く会い、その経験した結果によって、彼らの私への対し方は大てい、使役できる時には力を尽して使役し、なじることのできる時には力を尽してなじり、攻撃できる時には勿論力を尽して攻撃するものだ、と感じている。」（「『両地書』六九」一九二六・一一・七）

このような彼らに対しての、恩知らずに対しての、魯迅の血をすすっておきながら役に立たなかったと見るや打ちかかる者に対しての、献身者としての憤り、復讐の心情を、魯迅は、高長虹の

魯迅攻撃の始った一九二六年一〇月・一一月頃の時期に猛烈な形で抱いた、と思われる。[25] 言い換えれば、自己犠牲を自ら意志し望む立場とは矛盾するこの心情の沸騰こそが、自己の生・生きる意欲を肯定的に認める所へと魯迅を最終的に連結したのではなかったろうか。既に一九二五年夏の許広平等の説得によって、魯迅は自己の生きる意欲・価値を認めつつあり、また厦門に逃避すること（一九二六・八）が、次の闘争のための準備・休養だとされていた。この過程を経て一九二六年一〇月・一一月頃、寝食を忘れて献身した当の青年文学者に対する失望・憤り、献身者としての復讐の心情を強く抱くことによって、魯迅はこれまでの「一滴一滴と血を垂らし」して自己犠牲的に活動した生き方を反省し、最終的に自己の生きる意欲・価値を肯定することの正しさに確信を持った、と考えられる。[26] それは、魯迅の行動の在り方を自虐的方向に導く役割を果してきた裏返しの個性主義との訣別を、少くとも一九二四年以来、中国改革に関して自己の主体的生き方とかかわる時、彼の行動を深い所で規定した思想との訣別を、その訣別の内面的契機を、意味するものに他ならない、と思うのである。

注1：「魯迅とニーチェ」（尾上兼英、『日本中国学会報』第一三、一九六一、一〇四頁）、『魯迅――その文学と革命』（丸山昇、平凡社、一九六五、九一頁）、「魯迅における民衆と改革者」（細谷草子、『集刊東洋学』第一六、一九六六、一〇三頁）に、この指摘がみられる。

注2：『略講関于魯迅的事情』所収「魯迅任紹興師範学校校長的一年」（喬峯、人民文学出版社、

一九五四）

注3：茅盾は、魯迅の「創作小説の中には反面からの解釈が存在し、彼の雑感文や雑文の中には正面からの説明がある。単に魯迅の創作小説を読んだだけでは、必ずしも彼の意図を完全に理解しうるものではなく、彼の雑感集を必ず読まなくてはならない」（「魯迅論」一九二八）としている。これは、創作小説と雑感文等から受ける印象の大きな違いを、すなわち創作小説の暗さと雑感文等の明るさを示しているであろう。

注4：中で『野草』に収められた諸作品は、葛藤し揺れ動く、明にも暗にも位置づけ難い魯迅の心の反映、と一応捉えておきたい。

注5：「『自選集』自序」（一九三二・一二・一四『南腔北調集』）によれば、『自選集』を編集する際、「読者に一種の『重圧の感じ』を与える作品を、特にできるだけ取り除いた」という。「孤独者」は、『自選集』から取り除かれており、その理由は恐らく「重圧の感じ」を与えるという上記の事情によるであろう。

注6：「ニーチェは、彼は太陽であって、その光熱は尽きない、只与えるのみで、取ろうとは思わない、と自ら誇っていた。しかしニーチェは結局太陽ではなかった。彼は発狂してしまったのである。」（「拿来主義」一九三四・六・四）と魯迅はニーチェを後年評している。この「余波」とは、こうしたニーチェの考え・態度に影響を被っていたことを指すのであろう。『ツァラトゥストラはかく語った』（浅井真男訳、筑摩書房、世界文学大系四二）には、例えば、「私は愛する、おのれの浪費する魂を持ち、感謝を受けることを欲せず、また返却として与えるのではない者を。彼はつねに与えて、自分のために取っておかないからである。」

（「序」）や、「わたしの持っているものを取れ！わたしがあるところのものを取れ！取れば取るだけ、わたしは生に束縛されることが少なくなるのだ！」（「九、死の説教者について」）という言葉がみられる。

注7：「記談話」（一九二六・八・二三、『華蓋集続編』）、『魯迅訳文集』第一巻「説明」による。

注8：「『彷徨』中的幾篇描写知識分子的作品」（李桑牧、一九五三・一二、『魯迅小説論集』）

注9：「近代中国文学における知識人――魯迅『孤独者』を中心に――」（津田孝、一九六七、『近代中国の思想と文学』）

注10：人民文学出版社一九七六年出版、注釈者は天津碱廠工人理論組と南開大学中文系とされている。

注11：『魯迅』（竹内好、一九六一、未来社）

注12：『集刊東洋学』第一六、一九六六

注13：『魯迅選集』第二巻（一九五六、岩波書店）解説

注14：「魯迅論」（一九二八、李何林編『魯迅論』）

注15：「私」の耳からもがき出る号泣の解釈は、「魯迅『孤独者』について」（高田昭二、一九六〇、『岡山大学法文学部学術紀葉』第一三）による。

注16：挫折した改革者の持つ復讐の心情の表現は、「復讐」（一九二四・一二・二〇、『野草』）、「復讐其二」（同上）にすでに窺うことができる。

注17：女師大事件のこの間の経過は、『魯迅――その文学と革命』（丸山昇、一九六五、平凡社

）、「『女師大事件』をめぐる『語絲』と『現代評論』の論争について」（細谷草子、一九七四、『野草』第一六号）、『魯迅全集』第三巻注釈（一九六一）による。

注18：『魯迅《野草》注解（修訂本）』（李何林、一九七三、陳西人民出版社）からの『魯迅先生二三事』（孫伏園）の孫引によれば、魯迅は孫伏園に次のように語ったという。「魯迅は言った。『許氏は私を強く激励し、私が努めて仕事をし、なまけてはならないし、いいかげんにしてはならない、と要望した。』」これが「臘葉」を書いた本当の意味なのだ、と。

注19：一九二六年六月一七日李秉中あて書簡で、魯迅は次のように述べている。「去年の夏に、私は各処で障害にぶつかり、ひとしきりまったくの酒びたりとなり、その結果は病気になってしまいました。現在すでに直りましたが、もう酒を飲みません。これは医者が禁止したのです。彼はまた私の煙草を吸うことも禁じましたが、しかしこの方は私は従わないでいます。」只この「夏」と言うのは、一九二五年六、七、八月のいつを指すのかが問題となる。許広平は、「もしこのことを考えるとすれば、根本を治すことです。私は医者の言うとおりにしなくてはならないと思います、一、酒を多飲することを慎むこと、二、煙草を吸うのを少くしていただきたいこと。」（「『両地書』二三」一九二五・五・二七）と書いている。とすれば、医者の勧告は既に五月二七日以前に出ていたことになる。その後許広平は、「酒を『飲むようすすめる』人はいつまでもいますし、酒の肴もいたるところみなそれです。ただ求めることは自分にあるので、外のことはかまわないでおいていいのではないでしょうか。」（「『両地書』二七」一九二五・六・五）と飲酒に反対している。「『両地書』三三」（一九二五・六・二九）で魯迅は、デマを打ち破らなければならないとして、「第二に、私は何

らかの『戒律』も決して受けていません。私の母も私が飲酒するのを決して禁じていません。私は今に至るまで、本当に酔ったのは一回半あるだけで、こんなにおだやかではまったくありえません。」と言う。これらのふんい気からすると、許広平等の説得はまだ行なわれていないという気がする。そこで七月、八月のいずれかということになるが、

①『魯迅日記』によれば、一九二五年夏頃で「山本病院」に行ったという記載は、九月一、五、六、二五、二七日、一〇月一、三、五、八、一四、一七、二二、二九日と続く。一一月は二回のみ。ここからしてみると、魯迅は九月には病気を直そうと決心している、ととれる。

②こじれた女師大事件で旧勢力が横暴に結着をつけようとしたのが八月であること。

この二点によって、この「夏」とは八月のことを主として指し、許広平等の説得もこの八月のことであった、と私は想定しておきたい。

注20：『略講関于魯迅的事情』所収「魯迅爲青年服務一斑」（喬峯、前掲）

注21：許欽文は、「彼の小説を先生に編集してもらうようお願いした。」（許広平、『欣慰的紀念』）その本は出版後売れ行きがよく、そこで許欽文は、まもなく選に漏れたものを集めてさらに出版した。「先生はこれを見て、首を振りため息をついて言った。『私の選択には少なからぬ心血をそそいだ。どの種の代表作もすべて含めた。その他のそれらは、大変成功しているとは実際認めがたい。もう一度研究し練り育てて、恐れず削除するのでなければならない。それでこそ成果がありうる。』」（同上）

高長虹の場合、「先生が苦労して彼のために作品を選定し、校正して本となった後で」（同上）、彼は人に言った、魯迅は「『私の好いものをすべて選んで棄ててしまい、むしろ悪

いものを残したんだ。』」（同上）と。

孫伏園は（「我和『語絲』的始終」一九二九・一二・二二による）、『晨報副刊』の編集の座を追われた後、魯迅の協力を得て一九二四年一一月『語絲』を創刊した。『語絲』は販売部数をのばし、『晨報副刊』にかなりの打撃を与えた。そこで彼は魯迅に「彼らは、思いもかけず、爆薬を踏んづけたんですよ」と言った。そのことが、粉身砕骨してできた魯迅の思索や文章は他人のいざこざのために利用されるにすぎないと魯迅に感じさせ、少からぬ失望を与えた、という。

注22：一九二五年六月一三日「『両地書』二九」で魯迅は次のように述べる。「人は現状に対して、必ずいくらかの不平、反抗、改良の気持を持っているはずです。ただこの共同の目的で合作できます。」それは体裁よく言えば互助であるが、しかし魯迅の場合、利用されるだけで、「使われた後には、気力を費した自分一人を残すのみです。時には、彼はかえってなお人を罵ろうとする。人を罵らないのであれば、なお彼の厚恩に感謝しなければならない。私のしばしば無気力なのは、すなわちこのためです。しかし私はなお一切を忘却し、しばらく休息した後、新たにもう一度行うことができます。たとえ後の運命が必ずしも過去にまさるはずはない、とはっきり知っていたとしても。」たとえ自分の献身が利用されるだけにすぎず、そのため彼が無気力に陥っても、まだ立ち直ることができる、としている。

注23：一九二六年六月一七日李秉中あて書簡で魯迅は次のように述べている。「酒も飲みたいとは思うのです。しかしできません。というのも私は近頃急にまだ生きつづけていきたいと思うようになったからです。なぜなのだろうか。話せばいささかおかしなことかもしれません。

一点としては、私の生きつづけていくことを望む何人かの人がまだこの世にいることです。二点としては、まだ自分としてもいささか議論を起こしたいし、文学に関する本を少しは印刷したいことです。」許広平等の説得が、魯迅の自暴自棄から立ち直るのに大きな力を果したことが分る。

注24：「魯迅とニーチェ」（前掲）。ニーチェとの訣別の時期についての尾上氏のこの見解に、丸尾常喜氏（『『狂人日記』評価の一断面〈覚え書〉』、『野草』第一三号、一九七三）も賛成している。

注25：この献身者としての復讐の心情は、言うならば個人的な具体的な復讐の対象を持つ点で、挫折した改革者としての復讐の心情とは異る。この献身者としての復讐の心情は、「銹剣」（一九二六・一〇）に最も力強く写し出されたと思われる。細谷草子氏「魯迅『銹剣』について」（『京都女子大人文社会学会論叢』二五、一九七七）の指摘によれば、「銹剣」の第三章の復讐の達人黒い男は「宴え教者」と名乗られており、その名の意味は許広平の解説（『欣慰的紀念』）によって家の中の日本の女性（周作人の妻）に追い出された者ということが分る、とされる。つまりこれまで魯迅の血をすすっておきながら彼に打ちかかって来た者達、周作人夫婦、高長虹等の青年文学者に対する、献身者としての復讐の心情が、「銹剣」に写し出された、と私はとりたいのである。

注26：その確信は、一九二六年一一月一一日「写在『墳』后面」で次のように語られた。「しばしば自ら寛容に解釈して、一切の事物は、転変のうちにあって、必ず多くの中間物があるものだ、と考えている。あるいはまったく、進化の鎖にあっては、一切みな中間物であると言

ってよいかもしれない。「ここでさらに魯迅は、文学革命以来の自己の作家としての任務も、旧と新との中間物としての役割を果すものとして位置づけている。それは、自己の役割に対する正当な評価だった、と思われる。

《附》

この小稿は、『野草』（中国文芸研究会編）二三号掲載予定の「魯迅と『労働者セヴォリョフ』との出会い（試論）」へ上〉と記述の重なる所があり、心苦しいのですが、論証しようとしたことは、まったく別なので、読まれる方に御了承いただければと思います。